

夕刊フジ 2018年(平成30年)4月7日



北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長は先月25〜28日に訪中。習近平国家主席と会談し、「祖父の金日成主席と父親の金正日総書記の遺訓に従い、朝鮮半島の非核化実現に力を尽くすのは我々の一貫した立場」と表明した。中朝両国は5月に予定される米朝首脳会談の前に関係修復を図ったとみられる。

この会談に関し、成功したかのような報道も多い。しかし、これまで北朝鮮に求めた非核化交渉は1993〜2003年最大でも10発。2500発持っている米露に比べたら、オモチャみたいなものだ。ミサイル弾頭につけて相手のところで爆発させる精度などを考えると大きな脅威にはならない。

の米朝対話、03〜09年の6カ国協議など、失敗の歴史といていい。その間、北朝鮮は核やICBM(大陸間弾道ミサイル)を開発してきた。この問題について、私の考えをまとめてみた。

まず、北朝鮮の核の脅威は限定的だ。持っているといっても5〜6発。最大でも10発。2500発持っている米露に比べたら、オモチャみたいなものだ。ミサイル弾頭につけて相手のところで爆発させると大きな脅威にはならない。

テーブルについて北は脅威ではない

また、北朝鮮が唱える「朝鮮半島の非核化」は、核を持つ米軍の韓国撤退が大前提になっている。これは米国の国務長官に起用されるポンペオCIA長官や大統領安全保障担当補佐官に起用されるボルトン元国連大使ら保守強硬派は認めないだろ

う。

北朝鮮の主張する段階的核廃止も回答にならない。米朝会談が失敗に終わった場合、トランプ大統領は「プランB」を実行することをボルトン氏らと合意している。すなわち「アタック(鼻血作戦)」での決着だ。

そして、「歴代の大統領が成しえなかった武装解除を北朝鮮から勝ち取った」「悪の帝国に終止符を打った」と秋の中間選挙に向けて誇示する。トランプ氏の予測不能性と凶暴性というものが、北朝鮮に対しては圧力になる。金委員長は不安感をあおられて、従来とは異なる結果になるかもしれない。

だ。共産主義の独裁者は、おしなべて最終的には葬り去られている。金委員長は「死」が待っている。

なぜなら、もし韓国や米国と国交を樹立して南北の往来が活発化すれば、「南は貧困だ」「米国によって虐げられている」と自国民に言っていたウソがバレて体制は崩壊する。暴発してミサイルを发射しても、数時間で米韓軍に制圧される。つまり、どのみち「死」が待っているということだ。亡命を希望しても、その意向が漏れると側近に殺されるだろう。

マスコミは金委員長の外交力は巧みだと言っているが、私はそうは思わない。ニコニコ顔で握手しているだけだ。北のミサイルと核技術も米露中の脅威にはならない。暴発をするかもしれない、という秘密のベールに包

まれた北はもろろ脅威だったが、テーブルについて北朝鮮は脅威ではない。これが今の金委員長の現実ではないか。



ビジネス・ブレイクスルー(スカパー!557チャンネル)の番組「大前研一ライブ」から抜粋。

※動画閲覧に関し、タブレットで最適化されています。スマートフォンではタップ、拡大してご覧下さい。